

---

# 洗車の後で

長崎秋緒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

洗車の後で

### 【Nコード】

N0030E

### 【作者名】

長崎秋緒

### 【あらすじ】

わたしの勤めている中小の会社に男性の事務員がやってきた。ある日彼と洗車に行く約束をする。

## 前編

父の馴染みだからという理由で勧められた自動車工場の事務の仕事を始めようやく二ヶ月が経った。社長は父の同級生だからなのかわたしには特にやさしく接してくれていた。通常の業務にも一応の、自分なりの流れというものを見出し、先輩のおばちゃんとわたしより四つ上の陽子さんとは、表面では愛想よくできていた。おばちゃんの仕事は事務所にかかってくる電話の応対や、たまの来客にお茶出しするくらいの簡単なもので、せっかく一人一台あるパソコンをたたくことも稀で、わたしと陽子さんの受け持ちはもっぱら手作業の伝票整理と、作業員の勤務管理、それと時々銀行への入金や案内状を出しに郵便局へ出かけることだった。ほとんどが陽子さん任せだったに違いなく、おばちゃんがどうして雇われているのが最初は理解出来なかった。パソコンの入力は遅いけど、愛想はいいからわたしよりは来客対応はうまかったから、きっと適材適所なのだろう。

十人程の作業員は出入りが激しく、たまに若い子が入ったかと思えば、よく顔も覚えないうちに辞めてしまっていたし、その度に雇用保険のことでおばちゃんがぶつくさ愚痴っていた。

「せめて三ヶ月は勤め上げてから辞めるのが筋でしょう。堪え性がないのよね、うちにくる男共は」

「結構大変な仕事だからですね」

「ううん。何にも分からんうちからキツイばかり言ってたって、どこ行っても勤まらんわよ」

そういっておばちゃんは眼鏡のずれを直すしぐさのついでに、先日辞めていった彼らの代わりになのか、わたしを睨んでみせた。雇用保険の手続きなんてそんなに面倒なのだろうか、わたしが行いうけではないのでどうでもいいのだけど、人がすぐ辞めていくというのが最も気に入らないらしい。

おばちゃんの隣のデスクで昼ごはんを食べている陽子さんが我慢してねという風に眉をしかめているので、わかっていますという苦笑いを返してやる。陽子さんはわたしが入社する三年も前からここで働いていて、子供がいるから早い時間に帰ることを条件に入社していた。

わたしは大学卒業後、アルバイトばかりしていた生活から抜け出すことができ、初めて正社員として働くことになり、多少の不安もあったが、陽子さんとは何かと話が合い、職場の人間関係はほぼ良好といったところだった。でも、陽子さんの帰宅する五時から、わたしが帰る六時までの間おばちゃんと二人での業務となる。その時間にはやることもほとんどなくただ定時まで居ることが仕事みたいなものだが、その一時間おばちゃんの雑談に付き合わされることが苦痛でたまらない。せめてもう一人いてくれたらなんて考えてさらに二ヶ月が経ち、三人いれば困ることもない仕事内容にも関わらず、ある時社長がもう一人事務員を雇うといいだした。その話を社長がおばちゃんとしているのを聞きながら、わたしはひそかな期待をしていた。これでおばちゃんの愚痴を一手に引き受けずに済むのだと求人誌に広告を出した次の日すぐに希望者からの電話があった。

陽子さんが受けた電話の面接希望者は男だった。歳は二十八、電話の感じでは柔らかい物腰の人だったらしい。最近では男性の事務職希望者も多いそうだ。

でもうちの会社はそんなに給料はよくない。

男の人がこれだけの手取りで大丈夫なのだろうかとおばちゃんは勝手に心配していたけど、面接に訪れた彼は社長の提示した待遇に不満を言わなかったそうだ。

その次の日から、彼、岡田さんはわたしの隣のデスクで働くことになった。下っ端のわたしが岡田さんの教育係りというわけだ。最初だけ愛想の良い挨拶をくれた岡田さんは仕事に入ると寡黙で、必要なこと以外わたし達には話しかけてこなかった。その時の印象は大人しく真面目そうな人程度だった。

岡田さんの見た目はふつうといつては失礼だが、特徴のない、それでも毎日のネクタイの柄から身だしなみに気を配っていることは窺えたし、顔立ちだって色白だけど、並程度にはかっこいいと思っただ。わたしは幾分期待する気持ちもあり、なにかと理由をつけては彼に話しかけるようにしていた。そのうちおばちゃんや陽子さんも、初めのうちは知らぬふりでいてくれたが、おばちゃんがあからさまにそういう話題を岡田さんに振るようになってからは、その度にいちいちわたしはこどもみたいに照れたり怒ったりしていた。

ある時岡田さんと帰りが同じ時間になった。岡田さんは入社して二、三日後から社長に頼まれて、取引先の情報を簡単に検索するプログラムみたいなものを作成するため、残業をするようになっていた。通常の業務はわたし達でも充分こなせていたし、社長は岡田さんのことを事務員としてではなく、もつと上の責任者として育てたいらしく、取引のある会社の人達の会話の場によく呼ばれている岡田さんを見ておばちゃんが、「どれくらい持つかしら、いい子そうだから長く居てほしいわね」と年甲斐もなく色気づいていた。

その日は、陽子さんが、こどもが熱をだしたからと会社を休んだので、わたしは陽子さんの分の仕事を引き受けることになり、おばちゃんは「がんばってちょうだいね」と自分は歳だから仕事が増えるのはきついからなんて言い、手伝ってはくれず、ひと月足らずで基本業務をこなせるようになっていた岡田さんは社長に気に入られ、また別のことをやらされていた。当初の、人が増えたら楽になるという思惑ははずれ、わたしは陽子さんが、こどものことで、度々休みを取ることが疎ましくなってきた。その日も熱を出したこどもの為に、わたしは残業を強いられることになった。

駐車場で、車に乗り込もうとする岡田さんを見つけ、仕事の終わった開放感から駆け寄って話しかけてみた。職場外で話しかけるのは初めてだったのでこういう反応がくるか不安だったけど、岡田さんの方も開放感からか、珍しく笑顔を見せてくれた。

「今なんの作業をやってるんですか？」

「社内のパソコンを繋いでいます、ものすごく簡単に説明すると……、まあいろいろですね、なんでも屋みたいにやっていますよ」

「大変なんですか？」

「多少。業者を頼むくらいなら自分でやった方がいいという程度のもですよ。パソコンの数も多くはないですし、基本的な知識があれば出来ます」

「あ、なんかパソコンの資格持つてるんですね」

「はは、資格なんて必要ないですよ」と岡田さんは、本当は業者を入れるところを社長がケチって、試しに岡田さんにやらせているのだという話を教えてくれ、以前から気になっていたと前置きをして、伝票の整理を手作業でしていることにも触れ、いずれエクセルで出来るようにすることを約束してくれた。確かにエクセルでなんとか出来そうだとはわたしも考えてはいたが、勉強する気が湧かなかつたからそのままだった。もしかして岡田さんはわたしの作業をなんて面倒くさいことをしているんだなんて呆れていたのかも、と急に自分の不勉強さに恥ずかしさを覚えた。そういえば、

「何で敬語なんですか、普通にいいですよ」

「ああ、そうですね、じゃあ、早川さんはこの会社、どのくらい勤めているの」

岡田さんは多少くだけた物言いになり、まだ半年も経っていないと答えると、へえ、とだけ頷き口元をゆるめた笑顔をくれた。その後お互いの車について話した。わたしのは、親の軽で洗車なんてしたことないから黒の車体は汚れがひどいことにまた恥ずかしさを覚えた。なかなかそんな暇ないよねと岡田さんは言い、自分の白い車についた汚れを指で触って、

「結構洗ってないからなあ」

「わたしも手洗いしてみようかな。岡田さんはどこでやってるんですか？」

「うちの近所に大きな洗車場があるから、そこに行ってるよ」

「そこ、行ってみたいな」

「うん、言ってみなよ。安いし、一台ごとのスペースが広いから人氣あつて、平日の夜でも混むんだよ」

場所は明日詳しく教えるからと残し、岡田さんは車に乗り込んでしまい、わたしはちよつとした失望を感じ、お疲れ様でしたの声も控えめになつてしまふ。距離を詰めようとすれば僅かに身を引くような、岡田さんの態度をその時は、彼の遠慮がちな性格からくるものだろうとしか考えていなかった。

次の日、陽子さんが帰つた後、おばちゃんが席を外すタイミングを見計らつて岡田さんが洗車場までの地図を渡してくれた。わたしは特に気にはしていなかったのだけど、おばちゃんのことを考えてそうしたのだろう。岡田さんがわたし達の普段の会話をすっかり聞いていたことに加え、密やかな二人だけの遣り取りが出来たことが、岡田さんへの親密度を増していくように思えた。それだけでは我慢できずわたしは岡田さんの帰りに合わせ仕事を遅らせようと、形だけ氣遣うおばちゃんを先に帰し、時間調節の為、わざと席を外し、倉庫に備品を探しに行く振りをしたり、トイレに行つては鏡に写る自分をまじまじと眺めたりしていた。

トイレから戻ると、岡田さんが鞆に手をかけていたのが見えたので、

「もう、終わりですか？」

「うん、ところで、あの地図で分かりそうかな」そういいながら岡田さんは帰り支度を止める素振りを見せないで、慌ててわたしもパソコンの電源を切つてまわつた。いつの間にか、陽子さんとおばちゃんのパソコンの電源を最後に切つてから帰るのがわたしの役目になっていた。わたしが普段よりも急いでいる様子を感じ取つてくれたのか、岡田さんはまだ帰ろうとはせず、いったん椅子に座りなおし、デスクの引き出しを開け、中の整理を始めた。わたしがタイムカードに打刻し終わると、

「じゃあ、帰ろうか」と立ち上がり、わたし達は並んで駐車場まで歩いた。その途中で、今度の休みに洗車場で互いの車を洗う約束を

してその日は別れた。

祝日の午前中に、ホームセンターで待ち合わせをし、そこで洗車に必要な道具を買い揃えた。ほとんど岡田さんの手持ちのやつで済みそうだったので、わたしはスポンジと拭き取りタイプのクロス、岡田さんはセームという呼び方をしていたが、水に濡らしてから使うものらしい。自動車用洗剤は岡田さんの勧めるメーカーのものにし、洗剤を薄めて使う為の、赤く小さなかわいらしいプラスチック製のバケツを、それはわたしの趣味のものを選んで買った。

ホームセンターを出て、岡田さんの後について普段通ったことのない道を不安げに進むわたしを気にしてか、前を走る岡田さんの車はゆっくりとした運転を心がけているようだった。わたしの前に割り込んでくる車がある時は、前の車をわざと先に行かせてくれ、おかげでわたしは岡田さんの車を見失うことがなく、安心して初めての車道を走ることができた。

岡田さんの新車に近いくらい綺麗な流行のコンパクトカーは、少し気取った男達が好きそうなタイプで、ホワイトカラーはいかにも岡田さんらしい、きっと部屋の内装もマンションのモデルケースさながらのよく整理された部屋に違いない、いつか行ってみたいかな、なんて期待を抱き、いつかくるであろう岡田さんとの親密な関係を空想の中で繰り広げ走っていたら、洗車場までの道程をどう進んでいたのかほとんど覚えていなかった。帰りはどうしようかな。

駐車場は岡田さんの言っていたようにとても広く、中央にセルフのスタンドが、洗車する場所と室内清掃の場所を区切るように配置されており、洗車スペースは一台ごとに個室のようになっていた。十台以上ある洗車スペースの奥まった所に空きを見つけ、まずわたしの車から洗うことになった。その間岡田さんの車は、たぶんわたし達のような利用者を想定してか、きちんと待ち合いの駐車場も用意されていたのでそこに停め、小走りでかけてくる岡田さんの走り方がちょっと女の子っぽくって微笑ましくなった。



「じゃあ、まずその洗車ガン握って」と岡田さんは洗車機のコイン投入口に五百円玉を入れ、わたしが、払いますよというより早く「しっかり握ってね、勢いが凄いから」そういつて普段見せない意地悪そうな笑顔で、洗車機のスタートボタンを押した。機械音で開始のアナウンスが流れ、突然わたしの両手にびっくりするほど反動があった。その瞬間勢いよく飛び出した水は上方向に向かい、それを見て岡田さんは半笑いで、「だからいったでしょ、一旦止めようか」

停止ボタンを押しながら、代わりにやってあげるからとわたしの手からガンを取り上げ、慣れた手つきで、スプレーのごとく噴出する水の勢いにも動じない腕力は、やっぱり男の人だなと丁寧な作業の、その後ろ姿を、遠慮なく注視していた。

その後岡田さんに言われ、バケツに水を汲んで洗剤を入れる。泡立つくらいに混ぜたら、「車体が乾燥してしまうと洗剤が残るから、なるべく早く洗ってしまおう」

備え付けの台にのり、上は俺が洗うからと岡田さんはやけにきびきびと洗い始める。ワイパーを上げ、わたしはまずウインドガラスから手をつけることにした。泡大丈夫、と岡田さんが訊くので、わたしの方に飛んでこないか気にしてくれてるのかな、

「はい、ワイパーも洗ったほうがいいんですか？」

「そこ洗わないとびびるんだよね」

その際に、ワイパーが作動中にガツガツと引っかかったような音を出すことをそう言うのだと教わった。わたしは本当に無知なんだなとつくづく思い知らされる。岡田さんはわたしのことをどういう風にみているのだろうか……。車に詳しい女なんてそういないだろうし、今も手を休めず他人の車を洗い続けるこの人にはそんなことどうでもいいことなのかもしれない。それでも岡田さんに対しては卑屈になってしまう。好きになっちゃったんだな、わたし。

洗車がすんだら室内清掃のスペースに移りすぐに拭き取りを開始して、それもほとんど岡田さんが一人でやってくれ、

「ワックス買うの忘れてたね」とワックスも色によって使う種類が違ふことを教えてくれた。しかたがないのでワックスがけはせずに、次は岡田さんのをと思っていたら、その前に食事をしようと、もう行く店まで決めていたようで、わたし達は一度洗車場を出て近くの洋食屋に入った。

特別においしいとか有名とかではない店だったけど、二人で食事をするということが嬉しかったので、味なんて本当はどうでもよかった。それでも、

「けっこう美味しかったですね」とだけは、岡田さんの期待していただろう言葉を副え再び洗車場へ向かう。

昼過ぎの駐車場にはもう空きがなく、岡田さんの洗車は諦め、時間にも余裕があったので、二人でどこかへ行こうかという話になり、岡田さんの言動がよそよしく、それで勘付いてはいたが、自分から誘うのもためらわれるし、汗もかいているから、できれば初めての洗車で疲労した体でそんなことになるのは避けたかった。化粧だっておちかけてきてるのに。それでも食い下がる岡田さんに多少の不安を感じながらも、わたしは承諾した。

私の車は洗車場に残り、岡田さんの車で向かう。わたしはまだ戸惑いを消せずにいた。まだ間に合うかも、と信号待ちの度に考え、やっぱり止めますというタイミングをそのつど失い、とうとうホテルの入り口をくぐってしまった。

## 後編

わたしの車は洗車場にあるし、そのホテルに着くまでかなり距離があるように思われた。車を降りてからも迷いは消えず、ここで断わって、引き返す車内での気まずさとこれからの関係を慮り、わたしは岡田さんに誘われるまま、部屋を決めるのも彼任せで、エレベーター内の僅かな時間も、覚悟を決めることが出来ない自分と、こんな時だけ強引な岡田さんの態度に戸惑い、正しい判断を下せず、とうとう、こじんまりとした廊下にある一室内の扉の奥へと入ってしまった。鍵は岡田さんが持っていた。

お互い、初めてではないことは普段の会話から理解していた。わたしは部屋を見回すふりをしながら必死に冷静になろうと努めていた。ふいに、大きな衣擦れの音が室内に広がり、反応し振り向くと、岡田さんは上着を脱ぎTシャツの袖を捲くる最中だった。

肘から肩口にかけてミズミズみたいな傷痕が、目を覆いたくなるくらいにたくさんあって、一瞬で視線を逸らしたはずなのに、その光景がいつまでも脳裏に焼き付けられてしまった。

「ひくよね、いきなりじゃ……」

鈍く、重い口調の声に反応し、吸い寄せられるよう傷痕に視線が向かう。また見てしまった。一定方向に刻まれたそれらに逆らうよう幾つかの傷痕も目に入った。それはひどく乱雑な傷痕だった。血の滲んでいる、傷口の開いているものもあった。

「でも、騙してるみたいだから……」

どうしても確認したかったから、と大学生になった頃から、最初にはカッターナイフだったとか勝手に身の上話を彼は始めていたが、実際それどころではないわたしは、どうすればこの状況から無事に帰れるだろうか、最悪この人に体を自由にさせても仕方ないという考えにまで至っていた。岡田さんがいつの間にか、片手に剃刀を握っているのが見えたからだ。

これ、この剃刀が、よく切れるんだよ、とつぶやき、それを握る手元も落ち着かない。クスリでもやってんじゃないのかこの人。伏し目がちに濁った瞳の焦点がどこにあるのか分らない。

その類の人達をわたしも知らないわけではない。でも実際に遭遇したのは初だったし、いきなり痛々しい傷痕を見せられ、彼の子供時代の悲惨な身の上を脈絡も無いまま聞かされ、多少の同情はしたが、そのうえで一体わたしにどうしろと言うのだろうか。

それでも強引に、混乱する気持ちの中で、頼りない過去の知識を搾り出すようにして思い出そうと意識を集中させる。どこかで見たか聞いたかした、その類の人達の扱い方を。

反論するのはいけなかったはずだ。でも安易に同情するのもよくない、しかし無言のままにいる訳にもいかない。無視されていると思われて逆上しかねない。なにか言わなければ、

「モノマネします」

突然、岡田さんが最近テレビでよく見る、正直わたしにはまったく面白さが分からない芸人の一発芸をやリだした。片手に剃刀が握られたままなので、それがいつこちらに飛んできやしないかと身構え、その、大人の男がTシャツ姿で、袖を捲り、自傷痕まみれの腕を振り回し、そんなの関係ないと叫んでいる光景に青ざめ、わたしはぼうつと半開きの口から、よだれがたれているのに気がつくまで、放心状態でその奇行を眺めていた。

今、ここに狂った人がいる。この人は間違いなく精神異常者だと思つた。もしこれがこの人の演技だとしたらなんて考えも及ばないほど、はつきりとそう思わせる強烈な怪奇さがそこにはあつた。

息を切らしてひとしきり踊っていたかと思えば、今度は唐突にしゃがみこみ、膝を抱えた姿勢で黙り込む。肩が大きく上下に動く。気持ちの悪い生き物を見る心地だ。

こどもの頃、近所に無駄に吠える飼犬がいて、その道を通る度に慎重な足取りになったものだ。今、その時の慎重な足取りで、目の前の狂人を逆なでしないようにと、わたしはドアまでの距離を詰

めようとする。

「ごめんね……」

まだうずくまり肩で息をしている男の口からそう聴こえると、わたしは必死に堪えていた緊張が一度に解けその場に泣き崩れる。

しばらくの間、わたしの泣き声が室内に響きわたり、その間息を整えたそいつが、大丈夫、と立ち上がろうとして床に手をつけたから、また恐怖がぶり返し、

「動くな、近寄るな」と泣きじゃくりながら甲高い声で叫んだ。

大声で目の前の男を制し、わたしは立ち上がり、もう遠慮なくドアまで早歩きで向かう。

わたしに怒鳴られた瞬間、びくつと固まったまま動かないでいた男が、ドアノブに手を掛けたわたしを呼び止めこう言った。

「あの……、清算するなら、一緒に出よう」

慌てて上着を着ているその男の後姿に込み上げてくる怒りを抑えるため、わたしは両こぶしを固く握り締め、肉に食い込む我が爪の痛みの中、こう考えていた。

この人はひどい奴だ。わたしにも落ち度はある。勝手に理想の彼を作り上げ、この人ならどこまでついて来たのはわたしの判断なのだから。

でも、わたしの気持ちを利用し、わたしに対し、一方的な同情を求め、すがりつこうとしてきたこの人も、わたしの想いを裏切り、まだ芽吹きはじめだった愛情を踏み躪ったのだ。彼を非難するには充分すぎる理由ではないか、ずるい……。

いつの間にか口に出てしまったその言葉に彼が答える。「そうだね、ずるいね、ほんと、俺なんかどうして生きてんだろっね……」

知るか、勝手に死ねよ。

わたしを先頭に廊下を行き、エレベーターは、一緒に嫌だと愚図るわたしに従い、彼は後から降りてきた。清算は彼が済ませていた。そのまま出口まで一直線に向かうわたしを呼び止め、送ろうか、なんてこと彼が言わなかったのはお互いに幸運だった。そんなこと言

われていたなら、その場でぶん殴ってやっただろう。

ホテルから洗車場までの道程は全く覚えていなかった。それでもタクシーを拾ったり、他人に道を訊くことをしなかったのは、この言い知れない怒りと情けなさを体力で消費させたかったからだ。

足のひきつる程歩き回った後、夕暮れの建物の上に覗く、洗車場の電光板をようやく探し当てた頃には疲労感でいっぱいだった。それでも洗車場の従業員に、無断駐車がどうのと注意を受けると、怒りは蘇り、切れ気味に謝り、さっさと車内に乗り込んでやった。

岡田さんは、次の日から連絡も無く欠勤を続け、五日後の夜遅くに社長宅に辞表と菓子折りを持って現れた、と休み明けだったわたしは皆より一日遅れで聞かされた。

おばちゃんは雄弁に語り、岡田さんの離職回数が多いことに最初から疑問を持っていたと、彼の履歴書を覗き見ていたことをこれ見よがしに話し、「前にね、給湯室で薬を飲んでるのを見たことがあったのよ。風邪なのって訊いたら、そうですって」とあの時から怪しかったわね、あの子は、あの素振りは普通じゃなかったわ、そういつてまた眼鏡のズレを直す。わたしはおばちゃんの、眼鏡越しの上目遣いが苦手だった。他人の私生活を覗きたいと言わんばかりの眼差しはいつでも周囲を監視していたからこそ、そのことにも気づいたのだと思う。眼鏡、ズレないやつに買い替えてくれないかな。

陽子さんは、岡田さんのことにまるで無関心で、適当におばちゃんのおしゃべりに相槌を打っている。お弁当を食べる手を休めずに、軽くおばちゃんをあしらう、陽子さんの態度は見事だった。この中で陽子さんが一番幸せに生きているのかもしれない。結局他人に深入りしないほうがいいのだ。男女関係は深入りせざるを得ないのだけど、それでも、あんなことがあったから当分の間は男には関心を抱くまいと、わたしは心に誓う。

社長は途中になってしまった作業を電気屋を呼んでやらせていた。伝票整理も手作業のままだったが、わたしはひそかに本を買い、エ

クセルの勉強を始めていた。食事休憩の合間、教本片手にキーボードをたたくわたしの耳に、勝手に社長とおばちゃんの会話が入ってくる。

「やっぱり、男で事務員に成りたいなんて軟弱な奴はダメだな。今度からは女の事務員限定で募集しよう」と。

それなら、求人誌には、女性が安心して働ける職場です、とか書いておけば大丈夫でしょう、と陽子さんが言った。雇用の男女差別になるから、そういうニュアンスで求人を出せば、よっぽど空気の読めない男じゃなければ応募してこないらしい。陽子さんのさりげない冷淡さに憧れる。既婚の陽子さんと独身のわたしの女性としての違いはそこにあると思えてならない。わたしもそんな風に男をあしらえる女になりたい。

岡田さんが社長宅に訪れてから一週間もしないうちに、皆もう興味が失せたらしく、彼のことは誰も話さなくなった。元々入れ替わりの激しい職場ではあったから、皆の対応はそれなりに納得がいった。あの体験をしたのは、わたし一人なのだから。

岡田さんに興味があつたのはわたしくらいで、意外にも社内では真面目でパソコンに詳しい人程度の認知しかされていなかった。わたしだけが盲目だったらしい。だからこそ、あんなに、簡単にホテルにまで着いて行けたのだけど、もしあの時、わたしがほんの少しでも妥協した態度を見せていたらと考えるとぞつとする。あとで分かったことだが、男性作業員にわたしの身の回りのことをそれとなく訊いていたらしい。幸いストーリーカーされることはなかったが、岡田さんのような人達の気持ち、わたしのような常人が理解できるはずはないのだから、あの時、彼に歩み寄るということは、わたしも狂人の領域に踏み込んでいくということになっていたのだと考えてみれば、あの場面でみつともなく泣きじゃくって、叫んで、突き放しておいて本当によかった。彼が逆上してわたしに襲い掛かって来なかったことも幸運だった。

彼の身の上には同情はする。だからといって、わたしの足を引つ

張り、その世界に引きずり込もうとする行為には納得がいかない。  
あくまで、その不幸は貴方だけのものなのだから。彼は優しいので  
はなく、卑しいのだ。

とは言っても、彼のような人達は、また別の場所で、いい人の皮  
を被って、依存相手という名の獲物を見定め、その相手を捕獲すべ  
く似たような行動を繰り返しているに違いない。その女性がわたし  
のように、運よく彼の罠から逃れられるかは、もうわたしの考える  
範疇ではない。これはもうわたしには関係のないことなのだから。

わたしは“ふつう”で彼は“異常”その隔たりは大きく、決して  
ささやかな好奇心程度の愛情では埋められるものではないというこ  
とを今回のことでわたしは学んだ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0030e/>

---

洗車の後で

2010年10月8日15時50分発行